木嶋さんちと佐山さんち　3

木嶋さんちと佐山さんち　3

もくじ

三冊目のごあいさつ ―――― 水無月あるて ―――― 3
河野美絵医師の平穏な一日（探二十二歳） ―――― ドクター・ミー（ゲスト書下ろし） ―――― 4
Ａｆｆｅｃｔｉｏｎ（里香二十八歳、駆・探二十四歳）
―――― 夢路可帆（書き下ろし） ―――― 7
連作・この街に生きる（駆・探二十五歳）
凶兆／ミッシング／祈り／帰還／この街に生きる
―――― 水無月あるて（Artemis 掲載） ―――― 15
道玄坂にて（里香と双子のその後） ―――― 夢路可帆＆水無月あるて（書き下ろし） ―――― 25
三冊目のあとがき ―――― 夢路可帆 ―――― 31
野上家・木嶋家・佐山家関連図 ―――― 32
スペシャルサンクス
本文イラスト ―――― 美穂すろと

本誌に掲載の文章およびイラストの無断転載、コピーを禁じます。

三冊目のごあいさつ

二冊目から三年の時を経て、ようやく三冊目を発行することができました。

三年もかかってしまった理由は言い訳になるので詳しく書きませんが、当初の予定では二〇〇五年の十一月に最初の二冊同様、紙媒体の小冊子として発行するはずだったのです…。

諸事情により三年もかかって誕生したこの三冊目は、お待たせした分、私たちのサイトには登場しない木嶋家と佐山家のマル秘エピソードが満載です。

里香も双子も、全員が社会人になっています。職業は、里香が某出版社の編集部員、双子がどちらも警察官です（ただし駆は警視庁配属の地方公務員、探は警察庁配属の国家公務員ですが）。なんのことはない、みんな親と同じ職業だなんて、やっぱりカエルの子はカエルです。

各作品の解説は「あとがき」で夢路さまにお願いするとして、ここではアオリ的なエピソードだけご紹介しますね。

まず最初は、ゲスト作家ドクター・ミーさまの書き下ろし。私たちの共通の友人ミーさまは、この書下ろしの主役である研修医・河野美絵先生のモデルでもあります（モデルにしたのは私ですが・汗）。もともとミーさんはＣＨの二次創作では私の先輩ですから、自分で自分を書くという怪挙（誤字ではありません）もすらすらこなし、探ファンには嬉しいお話に仕上がっています。

もうひとつの書き下ろしは、ワイドショーも真っ青な里香の恋愛スクープです（笑）。お相手はなんとあの…！

意外や意外の二人の馴れ初めは「Ａｆｆｅｃｔｉｏｎ」にてご確認ください。

私のサイトで双子シリーズのエンディングにしている連作エピソードをトリに、木嶋さんと佐山さんちの本は、とりあえずこれにて完結します。こんなつたない同人誌未満の本を、心待ちにしてくださった方々、応援してくださった方々に、心から感謝いたします。

お礼代わりに、里香と双子の後日談をおまけとして付け加えました。このお話は、私と夢路さまがチャットしながらオンライン合作したものです。会話が多いのはそのせいです。いっそ、ということで芝居の台本風にしてみました。

本当はもっともっと感謝の言葉を並べたいところですが、前座の長口上は見苦しいもの。あとは夢路さまにお任せして、水無月はひっこみます。どうぞ里香と双子のお話をゆっくりお楽しみください。

ありがとうございました。今後はまたサイトにてお会いしましょう。

二〇〇八年四月

水無月あるて・記

河野美絵医師の平穏な一日

大学病院の研修医の朝は早い。

午前五時半。目覚まし時計のベルが鳴った。

「まるで修道僧か坊さんみたいやな、うち。」

と、自分で自分にツッコミながら、研修医生活二年目も佳境となってきた河野美絵は目覚ましを止めた。

思わず放り投げて壊したい衝動に駆られるが、それをしてもケータイで叩き起こされるのが関の山なのでやめた。

「そういや中世の修道僧は二時起きやったな。」

誰もそんなことは聞いていない。

夏至を過ぎたばかり。午前六時前の空は随分明るかった。

「関西やったらまだもうちょい暗いかな。」

と、昨夜のうちに洗濯しておいた洗濯物を干しながら、美絵はここが東日本であることを実感した。

「おはようございます。」

本日の美絵の服装はトラディショナルチェックの白いシャツにグレーのパンツ。

医局で白衣を羽織り、足元も黒いナースサンダルに履き替えている。昨今では針刺し事故などの危険から看護師たちはナースサンダルは禁止されて、シューズとなっている。

病棟の詰所では、午前零時から働いている深夜勤のナースたちが看護記録書きに没頭していた。

朝食前に患者の採血を済まさねばならない。だが大学病院ではナースは採血も注射も点滴も刺さない。すべて研修医の仕事だ。

美絵はトレイの上に採血道具を一式入れて、昨夜のうちに準備していた採血管の山とともにカートに乗せた。

「おはようさんですう。」

と、美絵は病室のドアを開けた。一応患者の起床時刻は午前七時なので、現在時刻六時半にはまだ眠っている方も多い。それでも今から始めねば終わらないのだ。

ここは血液内科。毎日のように膨大な量の採血をしなければならない。そして早く結果を出して輸血や点滴内容をオーダーするのだ。

「おはようございます。河野先生。今日も早いですね。」

「仁科さんこそ、もう起きてはったんですか？」

にっこり笑みながらも美絵は手を止めない。手早く仁科さんの袖をはぐると、上腕を駆血帯で縛って深正中静脈を浮かび上がらせた。すっとアルコール綿で表面消毒する。

「はい、じゃあチクっとしますでー…チクっ。」

これは美絵の口癖だった。別に彼女は狙っているわけではないが、大抵の患者はこれで和んでくれるのだった。

患者の朝食が始まる午前八時。昨夜帰宅後の患者の経過を看護記録でチェックする。

ナースの勤務引継ぎのミーティングの邪魔をせぬように片隅でこそこそと、であるが。

大学病院のヒエラルキーは確実に研修医の上にナースがいる。給料も彼女らのほうが高い（だが飲み会ではドクターが奢ることになっている）。

美絵はぶつぶつと計算しながら抗がん剤を点滴液に混ぜる作業を始めた。